

楡の会発達研究センター報告、その6の3

発達に心配のある幼児の療育学

3 社会性の発達

石川 丹

はじめに

発達の最近接領域

Vygotsky は子どもの発達には一人で出来る段階と大人のちょっとしたヒントや助けが必要な段階があると述べた。個々の子どものこの二つの段階の差が最も小さい所を見つける実力を身に着けることが、療育に関わる人間の最も大切な課題である。最小限の援助で子どもが自己実現出来るようになること、それが私たちの目指すところである。

社会性の発達

1. 社会化

(1) ヒトは人間になる

生物として生まれたヒトは成長して人間になる、という言葉はヒトは一人では生きて行けない社会的存在であることを意味する。ロビンソン・クルーソーは孤島でたった一人ではなく犬が一緒であった。人間の本質は社会的諸関係の総和である、とマルクスは言った。

ヒトが人間になる過程は子どもの発達そのものであるが、人間関係あるいは社会関係の発達という側面に焦点を当てると社会化という言い方になる。

(2) 社会化とは

心理学辞典によれば、子どもが所属する社会集団の中で効果的な構成員になるために、その集団で必要とされる知識、技能、態度、価値、動機、行動などを順次獲得して行く過程を社会化というとのことであるが、本稿では〈効果的な構成員になるために〉に焦点を当てる。

(3) 幼児期の社会化

幼児期社会化過程の考察に当たってのキーワードは自己理解、他者理解、折り合いをつける(妥協)、向社会的行動、非社会的行動、反社会的行動、言語、情動などである。

(4) 遊びにおける社会化

Parten は子どもの遊びにおける社会性の発達を以下のように述べた。2歳～2歳半は独り遊び、2歳半～3歳半は並行遊び(同じ場所で遊ぶが交流はない)、3歳半～4歳半は連合遊び(会話、貸し借りが認められ社会化が始まる)、4歳半以降は協同遊び(テーマ、役割、ルールがより明確になり、折り合いをつけることが日常的になる)をするようになる、と。

独り遊びや並行遊びの段階では同年齢の子とは交流しないが、大人との間でやり取りが学習され、象徴遊びの中で想像性が養われる。連合遊びや協同遊びの段階で社会化が進み、人間関係の中で想像性が養われる。

換言すると、機能的遊び→構成的遊び→ドラマ→ルールの経過を取るとも言える。

(5) 幼児期社会化のマイナス要因

幼児の発達相談の際に母親が訴える様々な心配事のうち、社会化の問題として捉えねばならない主訴のうち多いのは落ち着きがない、聞き分けがない、乱暴である。

発達カウンセリングの一番大切なことは相談者の主訴に対して相談者を納得させられる回答をすることであるので、この三つの主訴に対する回答はどのようふうになされるべきかを以下に述べる。

(6) 1歳半健診時に動きの多い子は就学時にどうなるか

吉川は1歳半健診親子面接時に母親の膝の上に座って居られず走り廻っている子を1124名中40名(3.6%)に認め、6歳時40名中15名(38%)は多動性消失、22名(55%)はADHDと診断されたと報告した。ADHDになった子の1歳半時リスクファクターは他人への警戒心がない、「ちょうだい」に応じない、要求と応答の指差しがない、であったと言う。なお、38%の子がどのようにして多動を消失させたのか、あるいは55%の子は何故ADHDになったのか、については言及していない。

2 ADHD (Attention-Deficit /Hyperactivity Disorder、注意欠如／多動性障害)

(1) アメリカ精神医学会の診断基準 (DSM-IV)

不注意および、または多動性・衝動性の症状が家庭でも学校でも著しい子どもを言う。原則的には小学生以上が対象とされている診断名である。場所を問わずどこでも落ち着きなく注意の集中や持続の困難な子どもをADHDと言うが、その子の歴年齢あるいは精神年齢から考えて過度の場合に診断される。

不注意優勢型、多動性・衝動性優勢型、混合型の3型があり、下記に診断基準を示すが、問題行動のいくつかは7歳以前に生じている。しかし、幼児期では正常の幅が大きく、症状が後に消失することもあるので認定は極度の場合に限られている。従って、この診断名は原則的には学童期の子どもを対象にしている。

アメリカでは学童の3～5%がADHDであろうと推定されていて、男女比は4:1～9:1、しかし、ほとんどの者は後期青年期には症状が減弱すると言われている。

アメリカ精神医学会の診断基準 (DSM-IV)

- A. 不注意 (以下の9項目のうち6つ以上が6ヵ月以上持続すればADHDと診断される)
- 1) 学業やその他の活動においてしばしば綿密に注意できない、または不注意な過ちをおかす。
 - 2) 課題または遊びに際して注意の持続がしばしば困難である。

- 3) 直接話しかけられた時にしばしば聞いていないように見える。
- 4) しばしば指示に従えず、学業や用事をやり遂げられない。
- 5) 課題や活動を順序立てることがしばしば困難である。
- 6) 学業や宿題など精神的努力の持続を要する課題をしばしば避ける、嫌う、または、いやいや行う。
- 7) おもちゃ、宿題、鉛筆、教科書など課題や活動に必要なものをしばしば無くす。
- 8) 外からの刺激によって容易に注意をそらされることがしばしばある。
- 9) 毎日の活動をしばしば忘れる。

B. 多動性・衝動性（以下の9項目のうちの6つ以上が6ヵ月以上持続する場合にADHDと診断される）

- 1) しばしば手足をそわそわ動かし、座っていてももじもじする。
- 2) 教室など座っていることを要求される状況でしばしば席を離れる。
- 3) しばしば余計に走り回ったり高い所に上がる。
- 4) 静かに遊んだり余暇活動に専念することがしばしば出来ない。
- 5) しばしば「じっとしていない」または「エンジンで動かされるように」行動する。
- 6) しばしばしゃべり過ぎる。
- 7) しばしば質問が終わる前に出し抜けに答え始める。
- 8) 順番を待つことがしばしば困難。
- 9) しばしば他人を妨害し邪魔する（例、会話やゲームに干渉する）。

（1～6が多動性の項目、7～9が衝動性の項目）

A、Bの症状は家庭と学校など2つ以上の状況で認めることが診断に必須である。

結局のところ、不注意とは注意集中困難、短期記憶障害（もの忘れ）、展望記憶（未来記憶）障害（し忘れ）、刺激過敏であり、多動性とはじっとしていないこと、衝動性とは自己制御困難である。

3. 動きの多い幼児への対応

（1）落ち着きのない4歳児A君

児童相談所の診察室に入ってきたA君はおもちゃ箱の中の一台の貨車を手にしたとたん部屋から出て行こうとした。これを見た母親は「いつもこうして突然なんです。」と言った。

そこで、A君に「行っていいよ。」と声を掛け担当セラピストにも一緒に行ってもらったところ、程なく貨車が2両つながった機関車トーマスを持って帰って来た。先に手にした貨車とつなげて走らせ、満足そうであった。

部屋を出た後の様子を一緒に行った職員に質すと、診察室に来る前の部屋に直行してそこで遊んでいたトーマスを取ったとのこと。その部屋でトーマスで遊んでいた待っていた

ところ診察の順番が来たので診察室に移動しようとしたが、嫌がってなかなか出ようとしないのを何とかだめて来たとのことであった。

ここで母親が言う“突然”にはA君なりの理由が有ることが分かった。トーマスに未練を持ったまま新しい部屋に来て貨車を目にしたとたん、トーマスを表象し前の部屋で遊んでいたことを思い出し、欲しくなって取りに行こうとしたという訳であった。

大切なことは“突然”に見えたときは貴方の意図は分からなかったけど、今は分かったよということ子どもにも分からせることである。そうでないと子どもは腑に落ちないことになるから、愛されていることに気付かないから。

(2) 人間の行動に突然はない、行動の前に必ず表象がある

人間は誰でもまず前頭葉で非言語的に表象してから行動を起こす。表象して行動するまでの時間は百分の一秒のレベルだから普通我々は表象を意識しない。よく考えて行動する場合は秒レベルになるので考えることが意識に上る。話しをする場合も発話行為の百分の一秒前の表象が前頭葉の運動性言語中枢で言語化されてから口から言葉が発せられる。

幼児は自分の表象を言語化するのが大人ほど速くないので、口より先に行動することが多い。子どもの行動が落ちつきないと写る場合、大人は子どもの動きの根拠つまり表象をあれこれ思い描いてどんどん分かって上げれば、子どもの行動は“突然”には見えなくなるはずである。

(3) 因果俱時

奈良時代の法相宗成唯識論という経典には「因果俱時」という言葉がある。「俱」は一緒という意味なので、原因と結果は同時に起こることがあるという意味である。行動は原因が生じたとたんに起きることがあると解釈すれば、人間の行動には突然はないという考え方は奈良時代から有ったことになる。

(4) ABC 行動分析法

応用行動分析学は、人間の行動は先行する刺激に対する反応として起き、反応結果としての行動の結果が次の行動の刺激になる、と考える。Aは *antecedent*、先行刺激、弁別刺激を意味し、行動のきっかけ、手がかりである。Bは *behavior*、反応、反応行動、行動。Cは *consequence*、結果、転じて結果刺激、後続刺激、強化刺激となり次の行動のきっかけになる。図式化すると $A \rightarrow B \rightarrow C = A' \rightarrow B' \rightarrow C' = A'' \rightarrow B'' \rightarrow C'' = A''' \dots$ と発展する。

例えば、自動販売機を誰でも使うようになったのは最初にコインを入れた時にちゃんと商品が出て来たからである。出て来た商品が次にコインを入れる時の刺激ないし原因になっている。最初にもし商品が出て来なければまたコインを入れる気にはならないはずである。

人間の行動には必ずきっかけがあるとすれば、落ち着きのない衝動性の高い子にだって必ずあることになる。

(5) 造反有理

中国の諺、造反有理の意味は「反抗するには理由がある」である。

動きの多い子は親の指示に従わないことが多いので親は聞き分けのない子と思うようになる。それが高じると反抗と写る。反抗と思ったら訳も考えずに抑えに掛かることになる。抑えられるので子どもは反撥してますます動きが激しくなる。だから、大人は子どもの行動を「造反有理」と考えて行動以前の表象を探り、子どもの表象を意識して対応すれば動きの多さの抑制につながるようになる。

大切なことは大人が子どもの表象を理解したら、大人はその分かったことを言語化したりして、理解したことを子どもにも分からせること、子どもに返すことである。そうしないと子どもは大人が分かったことが分からないので、コミュニケーションは双方向にならず、分かり合いは成立しない。

(6) 子どもの表象の親による言語化

子どもが自らの表象を言語化しないまま行動に移るとしたら、その表象を大人が正しく言語化して聞かせ、それを本人が納得したとしたり自己を対象化したことになる。自己の対象化は自己制御の根拠の一つであるので、子どもの行動は大人から見れば落ち着いて見えることになる。

(7) 多動衝動性の目立つB君（4歳7ヵ月）への適切な言葉掛け

B君を母親がいつもより早めに幼稚園に迎えに行ったら、不機嫌に「～ちゃん、5番、帰るっ！」と言ってお弁当を食べないでそのまま帰ろうとしている場面に遭遇した。事情を理解した母が「～ちゃんと5番のテーブルでお弁当を食べるつもりだったけど、～ちゃんが早く帰っちゃったので怒ってるんだ。」と声掛けしたところ、B君は「うん！」とうなずき、お弁当を食べて帰りその日は夜まで落ち着いて過ごした。母親がB君の表象をピットンコ言語化できたため児は落ち着いたというわけである。

4. 記憶

(1) ワーキング・メモリー (workingmemory、作業記憶)

人間は何かしようとする時、その事に関連する過去の経験を長期記憶から引っ張り出して来て過去を参照しながら今の行動を調整する。だから、初めての事をするときは参照に時間が掛かるため慎重になる。

ワーキング・メモリーとはある活動や課題の遂行に必要な知識を必要に応じてすぐ取り出せるように貯蔵しておく記憶のメカニズムである。状況の変化、課題の困難度の進行に伴って次々と更新した情報をしまっけて置きかつ取り出す前頭葉の認知機能である。

子どもは大人に比べて当然このワーキング・メモリーは未熟である。

(2) 記憶の種類と発達

記憶には言語を媒介とした記憶である陳述記憶と身体活動を媒介にした手続き記憶がある。陳述記憶には知識などの意味記憶（「知っている」）、出来事に関するエピソード記憶（「覚えている」）がある。また将来あるいは予定に関わる展望記憶（未来記憶）がある。

子どもの記憶の発達の道筋は『手続き記憶→意味記憶（現在を知る）→エピソード記憶（過去を思い出す）』である。まずは身体で覚え、ついで言葉でもって知識を増やし、自分を

物語り、体験を語ることを通じて記憶を増やす、という道筋を取る。

(3) 展望記憶（未来記憶）、つまり予定の記憶

予定の記憶がうまく行かない場合、し忘れが生じる。し忘れは不注意優勢型 ADHD の診断基準項目のうち 4) 学業や用事をやり遂げられない、5) 課題や活動を順序立てることが困難、7) おもちゃ、宿題、鉛筆、教科書などを無くす、9) 毎日の活動を忘れる、が相当する。不注意は記憶の問題でもある。

5. 聞き分け良くするには、待つ意識を育てるには

(1) 二つ先のアナウンス

(i) A 君のお母さんへの提案

上記、突然トーマスを取りに行こうとした A 君のお母さんには、一緒に外出した時は次とその次の行動予定を A 君に知らせることに努力して下さい、とお願いした。

例えば、友達の家に行く場合、赤信号で待ってる間に「信号渡ったら、二つ目の角を右に曲がるわよ。」、信号渡ったら「右に曲がったら白い家が見えるからそこに行くのよ。」、右に曲がったら見えた白い家を指差しながら「白い家にはお母さんのお友達が待ってるのよ。」、ドアチャイムを鳴らす前に「お菓子をご馳走してくれるはずよ。」と。

このように二つ先をアナウンスし続けたとしたら、行く先々ですべてお母さんの予告通りの事態を子どもは見ることになる。人間誰しも予想通りならニンマリ予測外れならガッカリだから、予想通りが続けば満足経験が多くなる。お母さんの言う通りになることを繰り返せば、お母さんの言葉掛けは信用出来ることになり、満足を期待して親の指示に耳を傾けるようにもなる。満足を期待できる指示を経験していれば、指示を待つことが可能になる。母の言葉掛けを注意して待つとしたら、それは親にとっては落ち着きが出て来たたと写るはず。

予想通りの経験は展望記憶（未来記憶、予定記憶）の向上につながる。

(ii) A 君のその後

3 ヶ月後、お母さんは「私、疲れました！」と言いながら診察室に入って来ました。続いてニコニコしながら「先生の言う通り二つ先のアナウンスをいつもしていたら、この頃飛びなしが少なくなって、落ち着きが出て来ました。」と教えてくれました。

大人は何かする時必ず予定を立ててからする。そして、予想外の事態になったら経験や記憶を元に修正しながらことを進めて目的を達成する。ところが、子どもは経験や記憶が少ないため大人はどうも調整出来ない。予想と違ったら、そこで立ち往生してどうしたら良いか分からなくなってオタオタしたり、闇雲に行動したりすることになる。大人にすればそれが落ち着きなく写ったり、衝動的に見えたりすることになる。

二つ先のアナウンスは子どもに予定通りの行動をすることの心地良さを教えることになるので、動きの多い子が落ち着いて来るのである。

(2) 二つ手前からのアナウンス

児相の診察室はカーペット敷きになっていて、筆者はセラピストと遊んでいる子どもを

観察しながら、母親の心配事に対して「～～したらいい」とを提案する。母親との話しが済むと「お母さんとおじさんのお話し終わったよ。さあ、お片付けして、さよならですよ。」と子どもに声を掛ける。セラピストと楽しく遊んでいた子どもは、言わば寝耳に水だから、多くは遊びを続けたり、ぐずったり、怒ったりして片付けを拒否する。

そうした子の場合、筆者は自分の突然のアナウンスの非合理性を認識しつつ「後2回遊んでいいよ。」と声掛けし、母との話しに戻り、頃合を見て「後1回ね。」と言い、また少ししたら「もうお片付けだよ。」と3回目のアナウンスをする。そうするとほとんどの子はお片付けしてから退室する。その際、お母さんに二つ前からのアナウンスの意義、つまり、なだめたり透かしたりして子どもに予定を作る余裕を与え、換言すれば折り合いをつけることに時間を掛ければだんだんに聞き分けが良くなると説明する。

(3) 鳩時計

最近は時報が鳴る時計はほとんどない。時間意識や先を見越して待つ意識の芽生え、予測し易い環境作りには時報の鳴る時計、特に鳩時計が有用である。「ポッポが三つ鳴いたらおやつよ。」「ポッポが鳴くまで待ってて。」などと声掛けし、鳩が飛び出して鳴くのを楽しみに期待させることは『予想通りでニンマリ』を導き、待つ意識を育てる。

6. 問題行動は「見てくれ」行動

(1) C君はD先生が居ない時におしっこをちびる、と相談されたことがある。このちびりはD先生が居なくて寂しいと感じているC君の心を物語る。大人から見れば問題行動と写るC君のちびりは「先生、もっと僕を見てよ」を込めた行動であると理解すべきである。

いわゆる問題行動は幼児でも思春期の子でも、自分をもっと「見てよ」という気持ちを込めた行動である可能性を大人は認識すべきである。

先のABC行動分析法に照らせば、D先生が居ないことが先行刺激になっていることになるので、対策としてはD先生が子どもの視野に入っている時に「D先生居るよ！ おしっこに行こう！」とトイレに誘い、D先生が居ることが先行刺激になるように工夫することであろう。

(2) 「これ見よがし」行動

「これ見よがしにわざと悪さをして困るんです。」と訴える母親がいる。こう訴える母親は子どもの心をちゃんと捉えているのだが、そのことに気付いていないことを示している。上述の通り大人から見て問題と写る行動は「見てよ」行動なのだから、その悪さ加減は大人が見ればうんと悪く写るようにした方が有効となる。「わざと」と言える母親はそのことを無意識の世界では分かっていることを示している。母親の「だめっ！」「止めなさい」という声掛けを子どもは見てもらえたと理解する。否定語として使った母親の意図とは正反対に、子どもは見てもらえたと満足して肯定語と解釈する。だから、もっと見てもらいたいと思えば行動は当然エスカレートする。エスカレートすれば母親はもっと「だめだめ」言う。母親は否定しているつもりだが子どもはまた見てもらえたと理解する。この矛盾、悪循環が「わざと」をエスカレートさせるのである。

(3) 「だめっ！」から「～～しよう」へ。

行動を頭から「だめ！」と否定されたら、子どもは代わりに何をしたらよいか分からなくなる。急な予定変更があった場合の代案はほとんど持っていない。だから、大人にすれば好ましくない行動をする子どもに対しては、大人が代案を示し、それに子どもが乗って来れるようになだめたり透かしたりして交渉し、折り合いを着けられるように工夫し、子どもに付き合うべきである。

7. 乱暴、攻撃性

攻撃性のある幼児は動きの多い子に比べて少ない。しかし、アメリカではADHDの子は長じて攻撃性を強めたり行為障害に変容することが多いことが指摘されている。だから、幼児期から乱暴や攻撃性のある子の発達援助は肝要である。

(1) 反抗挑戦性障害 (Oppositional Defiant Disorder, ODD) (DSM-IV)

少なくとも6ヵ月以上続く拒絶的、反抗的、挑戦的な行動様式で、以下の9項目中4つ(またはそれ以上)が存在する:

- 1) しばしばかんしゃくを起こす
- 2) しばしば大人と口論する
- 3) しばしば大人の要求や規則に従うことを積極的に拒否、反抗する
- 4) しばしば故意に他人をいらだたせる
- 5) しばしば自分の失敗、無作法を他人のせいにする
- 6) しばしば神経過敏、他人からいらいらさせられ易い
- 7) しばしば怒る、腹をたてる
- 8) しばしば意地悪で執念深い

(2) 1歳児の愛着行動の類型 (エインズワース)

母子で居る部屋に見知らぬ女性が入室し代わりに母親が児を置いて退室、1～3分後に母親が戻った場合の子どもの行動を、エインズワースという人が観察したところ次の三つに分類された。

- A、回避不安定…分離時不安を示さず、再会時母を避ける (0～20%)
 - B、正常安定 …分離時多少の不安、再会時母にすがりつく (60～70%)
 - C、両価不安定…分離時強い不安、再会時母にしがみつき叩いたりして怒る (10～30%)
- 三類型の割合はどの国の子どもでも概ね同じである。

(3) ぐずり易い子、育てにくいと写る子

エインズワースの言う両価不安定型の子は、日常生活の中で親にとってはぐずりが強く育てにくい子と写る。親子間の葛藤はだんだんに多くなり、幼児期には親の子に対する拒否感が強くなってしまうことがある。だから、発達心理学的に正しい子どもの心の抱え方を母親に教示し続けねばならない。

(4) 「もっと愛して」行動

ぐずりは子どもが満足できていないことの表現である。言語表現が不十分なため表象を

正確に言語化できない0～1歳児は、当然行動表現を主要な伝達手段にする。母親の非言語的コミュニケーション努力は乳児期には日常的に行われているが、母親側からの発信が意にそぐわない場合、子どもはnoとしてぐずりで答える。母親がああしたり、こうしてもぐずりが納まらない場合は子どもの要求水準が高過ぎることになる。母親にすれば手を焼く事象なのだが、子どもからすれば「もっと愛して」を表現していることになる。有島武郎は「惜しみなく愛は奪う」という小説を書いた。

「お母さん、この子のがぐずるのは『お母さん、もっと愛して』と言ってるのですよ。お母さんはうれしい悲鳴を上げていることになります。ぐずりが続くのは『こうじゃない、それでもない』というこの子の表現だから、この子は頭が良いということです。『試される大地』という北海道のキャッチフレーズがありますが、お母さんはこの子に試されていることになります。ありがた迷惑もしれませんが、今まで以上にこの子と付き合ってください。」と説明、お願いをする。

(5) 心因反応としての攻撃性

攻撃行動の目立つ幼児では爪噛み、指しゃぶり、夜泣き、チックなど葛藤に基づく神経症的習癖（心因による症状、心因反応、依存行動）も併せ持つ子が多い。こういう子の場合の攻撃行動は神経性習癖と同じ心理的葛藤による『止むに止まれぬ』行動と理解しなければならない。だから、葛藤の結果として表現された攻撃性にのみ目を向けるのではなく、葛藤そのものに注意を注ぐことの大切さを母親に説明する。こうした本質的な所での対応を指導しないと、葛藤は進行し攻撃性も強まってしまう。

(6) 心因反応に関する母親への説明

「～したいがうまく行かない」という思いには願望と現実の矛盾が込められている。これは大人も子どもも赤ちゃんでも同じである。ここに心理学用語で言う葛藤が生じる。人生は葛藤の発生と解消の連続と言っても過言ではないが、人との関係の中で生きる以上自我と自我の衝突が無いことは有り得ないから、葛藤発生は必然である。でも、ずぼら、鈍感、人間の大きい人と、デリケート、繊細、悩み易い人では葛藤の発生は質的量的に違うことになる。葛藤の解消の仕方にも個人差が出る。

葛藤が多さは人間を豊かにする。何故なら、子どもが大人になるということは、自分自身の特徴や得手不得手を理解して自分を社会の中で操作し使いこなすことであるので、葛藤の多い人は自分理解にエネルギーをたくさん使う人と言いうことができるからである。

心因反応としての症状を出す子は葛藤が多く、豊かで繊細な子と言える。そこで筆者は母親にはこの点をしっかり胸に刻んでもらい、結果としての症状ではなく、葛藤が発生する事象、つまり「～したいんだけどうまく行かない」という子どもの心に目を向けてもらえるようお願いしている。それが子どもの葛藤解消につながることを理解してもらうように説明している。

8. 愛他行動を育てよう

攻撃行動とは反対に位置する子どもの好ましい社会的行動には愛他行動（向社会的行動）

がある。

1歳過ぎると子どもはお腹を痛がっている人の腹部をなでる、2歳過ぎると母親の家事を手伝うなどの行動をする。こうした他人を愛でる行動の発達には親の養育態度に影響される。子どもの要求に敏感で愛情あふれる養育態度、他人の気持ちを尊重しつつ子どもの意志との兼ね合いを説明的にする躰は子どもの愛他行動を育てる。

断定的禁止、体罰、力による躰は子どもの攻撃性を育てる。

9. 「心の理論」

チンパンジーは人間が困っている状態に合わせて必要な道具を差し出せる事が観察され、チンパンジーも人間の心の状態を推測できている子とが分かった。この能力を「心の理論」という。

自閉症児にこの「心の理論」があるかどうかを Baron-Cohen らはサリーとアンの課題を使って調べた。その結果自閉症児では20%の子にしか「心の理論」が無いことが分かった。普通の子は4歳になれば正答できる。だから、社会性の育ちには「心の理論」の達成が必要であるとされるようになった。

サリーとアンの課題を以下(11頁)に示す。「サリーは籠を持っています。アンは箱を持っています。サリーは持っているビー玉を籠に入れ、外に散歩に出かけました。残ったアンはサリーのビー玉を籠から取り出して自分の箱に入れました。帰って来たサリーはビー玉で遊びたいと思いました。さて、サリーはどこを捜すでしょうか?」と説明しながらストーリーのある絵を子どもに見せて問う。正解は籠を捜すである。これによって他人の立場に立って物事を考えることが出来るようになってきているか、つまり他者視点を獲得できているかを判定することが出来る。

10. 4～5歳児の自己制御の発達要因

岩田(2001)は幼児の自己コントロールの促進要因を次のように上げている。「教えてあげる」という発言の増加が教え合い、学び合い、共同遊びを促進する。自発的謝罪を言えるようになる。本音を抑制して折り合いをつける、ただし、根に持つという心情がその発達過程にある。仲間の性格特性を理解してその子の行動を予測する。見通しを立てる。先を見越して待つ(未来志向的遅延行動)。二つの行動プランを同時に立て、並列的に行動する。感情と行動、感情と表情を区別し、心と行動が矛盾した行動を取れる(顔で笑って心で泣いて)。自分に言い聞かせる。過去から今を我慢する、未来のために今を我慢する。

引用文献

吉川領一：1歳6ヵ月時の多動と就学前の注意欠陥・多動障害. 精神神経学誌 99: 47-67, 1997.

渡辺正孝：記憶と前頭連合野. 神経進歩 : 45 : 209-210, 2001.

船橋新太郎：前頭連合野とワーキングメモリ. 神経進歩 45:223p234, 2001.

矢澤圭介：新生児・乳児期：発達心理学ハンドブック、東・繁田・田島、編、福村出版、東

京、1992. p430-450.

石川 丹：心因反応の理解と心理療法. 臨小医 45 : 41-43、1997.

岩田純一：〈わたし〉の発達. ミネルヴァ書房、京都、2001.

サリーとアンの課題

サリーは籠を持っています。アンは箱を持っています。

サリーはボールを籠に入れて出て行きました。

サリーがいなくなった後、アンはボールを箱に入れて、いなくなりました。

戻ってきたサリーはボールで遊ぼうと思いました。

さて、サリーは籠を探さうでしょうか？ 箱を探さうでしょうか？

70

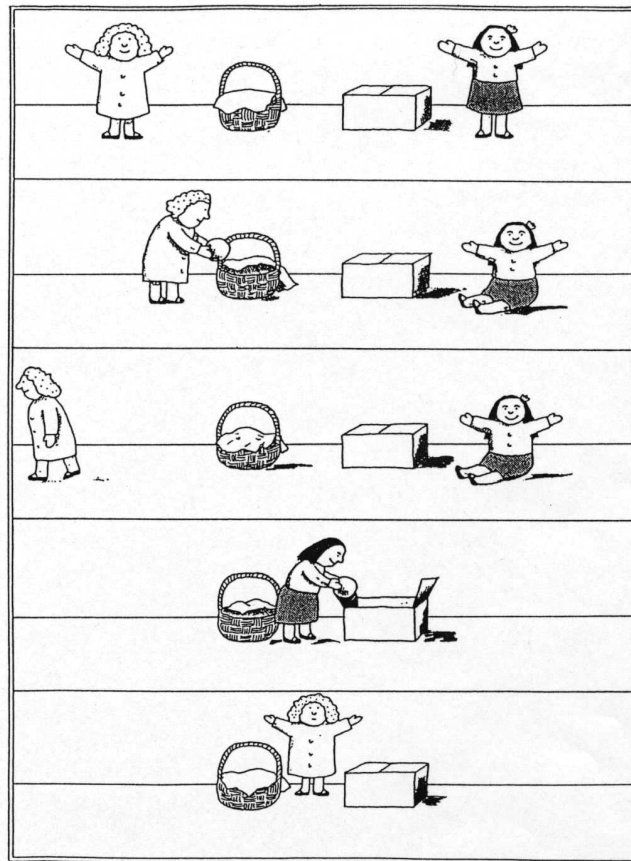


図 5.1 サリーとアン課題 (画家 Axel Scheffler の許可により Frith : 1989 a から転載)。